

当院初期臨床研修の概況

総合診療部部长 酒井 賢一郎
Sakai Kenichiro

今年も3月で大学卒業後2年間の初期臨床研修を11名の若手医師が終えようとしています。近隣の医療機関の諸先生方、地域住民の方々に様々な研鑽の機会をいただきましたこと深謝いたします。

ここで当院の初期臨床研修の概況を改めてご報告させていただきます。common diseaseから高度先進医療まで多岐に渡る疾患の診療にあたる急性期総合病院である当院では、多くの指導医の下 豊富な臨床経験が積めております。同様な規模の病院は福岡県内でも数施設あるのですが、中でも内科は当院で経験できる診療全科の指導を受けること、従来選択必修科とされている外科・小児科・産婦人科が、当院では必修科となっている点、がん診療連携拠点病院であることから緩和ケア病棟で終末期医療や疼痛緩和の研修を受けることが当院研修の特徴です。2年間のスケジュールは内科6か月、外科3か月、麻酔・救急4か月、小児科1か月、産婦人科1か月、緩和ケア科1か月、地域医療1か月、精神科その他自由選択期間が計7か月となっています。研修医の出身大学は九州大学をはじめとする九州山口の国立大学、福岡県内の私立大学出身者が過半数を占めております。研修医からは基本的診療技能の獲得のほか、将来目指す専門性につながる研修ができるといった理由の次に、「出身地である北九州の医療に貢献したい」という希望の声をこれまで多く聞いてきました。

当院の若手医師育成の役割は初期臨床研修の2年間に留まらず、平成16年から昨年までに初期研修を終えた138名のうち65名がその後の専門課程の修練を当院でスタートしております。内科、外科、小児科、産婦人科、麻酔科、病理検査科、心臓外科、整形外科、放射線科等です。関連大学医局に入局した上で当院に派遣される場合が多いのですが、これも北九州という地域の中で高い専門性と指導力を当院の各診療科が有していることの現れかと考えております。彼ら若手医師が今度は後輩たちの良きロールモデルとして更に成長していく姿を見届けることも、私たち指導医としては喜びであります。

とはいえ、まだまだ臨床医として未熟な点も多々あるかと存じます。私が医師になった20年程前に比べると医学関連の情報量だけでも格段に増えており、その中から患者さんに必要な情報を取捨選択して適切に最善の医療を提供することが求められます。ただ提供するだけでなく、患者さんやご家族の希望も尋ねた上で医師・患者の共通基盤を見出して診療を行っていく「患者中心の医療」の実践が謳われるようになりました。慢性期・回復期の医療や保健・福祉とのつながりの中で地域医療を支える方々の視点も一臨床医としては益々求められるかと存じます。日ごろから地域医療を担っておられる各医療機関の諸先生方には、若き医師へ今後とも温かいご指導・ご鞭撻のほどよろしくごお願い申し上げます。